

## 「母と私の二つの夢」

宮城県 及川祐依

その日、母は少し酔いがまわって、とてもご機嫌だった。母と私、二人きりの食卓。大学の授業が上手くいかないだとか、たわいもないことを話していた時に、母が「お母さんの夢の話をしてあげる」と言い出した。

母の話は、成人式の話から始まった。母は高校生の際に自分の母親を亡くしている。だから成人式のときに、お兄さんと着物を選んだらしい。成人式当日。仲の良い友達を見て母は思った。「あ、この着物きつとお母さんと選んだのだろうか」と。色合いや、全体の雰囲気などを見ると本人の好みだけとは思えなかったのだそうだ。母はそれがとても羨ましかった。そして、母は心に誓った。自分の子供ができたら絶対に立派な着物を買ってやろう、お母さんはこういうのを着て欲しいとか娘に言いながら一緒に選ぶんだと。

私はその話を聞いてびっくりした。「一生に一度なんだよっ!」という母の言葉に「着物なんて高いのレンタルで良いよ、っていうかどうでもいいし」と対応していた自分を思い出して、胸が痛んだ。

母の二つ目の夢は、私の出産に立ち会うことである。母は一人で初産を迎えた。隣の分娩室から別な妊産婦さんの「死ぬー!! もう絶対無理!」と叫んでる声が聞こえた。その直ぐ後に「そんなことで死んでどうするの! 子育てはもっと大変よ、頑張れ!」と言う声が聞こえたのだという。母はその言葉を聞いて孤独感で一杯になった。だから母はもう一つの夢を作ったのだ。自分の娘の最初の分娩の時は傍にいてやろう。強く手を握って「ちよっとあたしの娘なら気張みなさい!」と言ってやろうと。

「だからゆいちゃん、私の夢に付き合っただね、お願いよ。」母の言葉に私はぶんぶん頭を振った。ありがとう、とごめんなさい、という両方の気持ちで涙が出た。

後日、成人式の着物はとても素敵なものを母と選んだ。あの日から私の夢は、母の素敵な夢と一緒に叶えることである。